

42 破天荒

令和 二年度版
創刊
第三十七号

四十二回生「一学期始動」

先週末に、一学期終了の宣言とともに、破天荒第三十六号の発行を行いました。少々滑稽な第三十七号の発行ですが、例年の夏季休業中補習に向かう一日とでも捉えてみればどうでしょう。未曾有の出来事が続く四十二回生の「いま」だからこそ、通常の発想を変えて今日からの八月の生活に臨んでみましょう。

まずは、補習に取って代わるものを何で代用するか。場合によっては、科目によって課題が課される可能性もあります。今まで以上に、提出ありきでない効果的な学習計画を立て、実践してください。課題が課されない科目においては、優先順位をつけて取り組みましょう。

私は、人の視線を感じるところで自分の苦手な科目に取り組みました。具体的に言えば、私は古文が苦手だったので、毎日、国語を学習する時間を割り当てました。割り当てた時間の前半は、単語・熟語の整理をしてから、後半は問題演習を繰り返しました。確か日栄社だったと思います。内容は、結構ハードでしたが、何せ薄い。やり切った感には自信になりました。

家に帰ると、自信のある科目に取り組みました。自信があるとはいえず、各大学の入試問題です。何度も鉛筆や問題集には痛い思いを味わってしまいました。ただ、そのときに感じた自分の力の無さ、理解したい貪欲さ、折れない心は、自分の人生の中で大きく役に立っています。得意と思う科目でさえ、入試という敵の前では、まだまだ無力です。それを知り、闘うか逃げるかを迷い、でも、淡々と自分の決めたことを繰り返したのが、受験生の夏休みであったと記憶しています。

また、今ほど猛暑ではなかったですが、今よりも学習環境としては整備されているとは言い難い、学校の教室が、落ち着いて規則正しく学習に取り組み始める一番の場所でした。勿論、自分自身が落ち着くだけでなく、教室からグラウンドを眺めれば、部活動とともに切磋した先輩たちの頑張りにも触れることが、励みの一つにもなりました。

生徒の皆さんにあった時間の過ごし方は、それぞれ異なると思います。ただ、

起床時間

学習開始時間

就寝時間

のどれか一つでも乱れれば、受験の成功はない。その一例として、私達は「一日最低八時間」の高校三年生夏休みの学習を課されました。それを上回る一日十四時間の学習に固執し、特に、起床時間を乱していった同級生は、夏の終わりに心を病んでしまいました。卒業後二十年の同窓会では、元氣そうなお姿に出会えて一安心でしたが、適切なリズム感を保ちながら、課題克服・能力の器を拡げていくことに心掛けて頂きたいものです。

常に

「してやりたいな」と思っていることを行動の原点に

行動の原点に

持つて、ここまでやってきました。

勿論、これからもその気持ちは変わりません。皆さんとの会話の中で、皆さんが望んでいることに気付き、その中で実現・継続可能なことを、形にしていきたいと思います。一学期終了号で紹介した、「医療の現場から」のレポートも、気持ちの入った提出者の姿が多く見られます。休日学ぼうクラブも、休日ではありますが、規則正しい時間に登校し、自学の雰囲気を持ち、自分の計画に従って学んでいる姿に、学問とは主体性があって成り立つものだ、実感しております。あとは、チームとして、どんなふうにも各々を成長させた集合体になっていくか、各々の主体性に基づいた努力を積み重ねてほしいものです。

時間の長さではない

集中力の量 であり

規則正しい日々の生活

日々の授業を規則正しく復習しておれば、定期考査の時間に、改めて長い文章を読むことから始めなくても、読み出して題材が何かを理解し、授業でどんな話がされたかを振り返ることができるし、問われている部分について、精選して読むだけで問題を解くのに大きく時間短縮が成されて、より高い集中力が保たれます。「時間が足りない・・・」と言っている皆さんの大半は、試験だからすべてをリセットして問題に向かい合うところから始めていませんか？

定期考査に限らず、自分の中に、問題に対することがデータベース化されていけば、作業量に掛ける時間は格段に減ります。脳内にあるデータベース化された知識を引き出し、利用することは、カンニング行為でも何でもありません。自分の武器です。日々の学習とは、自分の為に、情報をデータベース化し、利用の最適化を図るために行うものであり、重要なものです。

正しいと確信できることだけでなく、これはどうだと思ふことを答案用紙に表現してください。書いても、ときには零点もあります。書かねば常に零点です。

一点に泣く習慣でなく

一点に笑う習慣を身につけよう

以前にも話しましたが、私の大学入試個別試験は、得意の数学で地獄に落とされ、英語で助けられました。助けられたと思う英語も、英語力と言うよりも、問題の一つが大学のある街並み、風景等についての地理・関心力でした。文章と向かい合うと言うよりも、その文章のキーワードから、浮かび上がった大学の街並みを、文章に当てはめていったことで、自信を持つことができなかった単語も、意識から想像することができました。実際の文法力や単語力を活用しなくとも解くことができたことで、英語の時間はリズムに乗って時間を過ごすことができました。全くの運というわけではないですが、高校生の知識だけでなく、雑学や読書から得られる一般常識に救われたことを、いつまで経っても忘れることができません。

共通テストの祖父母（二世代前のテスト）にあたる共通一次試験の国語にしてもそうでした。それまでの練習で、最後の二択には必ず正解はあったけれども、最後はいつも解答の逆を選んでしまう自分自身の傾向を、実際の共通一次試験では、二択で自分が正しいと思った方の逆をマークする！という、国語の先生からすれば、「テストをなんと心得るか」と一喝されそうな行動を取りました。結果論ではありますが、功を奏し、点数だけは考える以上に形にすることができました。

これも運なのかもしれませんが、その行動に至るまでには、必死で問題に取り組み、何度も解き、何度も振り返り、何度も奥歯を噛みしめた日々がありました。そして、自分の傾向を知り、最後は覚悟を決めました。

こう言えば、綺麗に聞こえますが、実際には、震えながらマークをしました。何故ならば、自分の考えを裏切る行為を自らに課したわけですから。

さあ、夏休み中に二学期がスタートします。皆さんには、自分の行動を裏切らない実力をつけてもらう、未曾有の中の夏休みであってほしいと思います。

四十二回生の皆さん、一日一日が

ひたむきに ひたすらに 真摯に

充実したこの一か月を、期待します。

